

## 『南タイを経験する：人々のパースペクティブから見た現代の社会変化』

——第1回南タイ国際会議報告——

西井涼子\*

南タイという非常に限定された地域を中心とした国際会議が、2002年6月13日から15日にかけてプリンス・オブ・ソクラー大学主催によって南タイ東海岸のパタニで行われた\*\*。南タイは、東南アジアの仏教圏とイスラーム圏の接点に位置し、南タイをめぐる問題領域はたんにタイの南部という地域にとどまらず、幅広い視点からの関心とつながりうる可能性をもっている。

実際、この会議への参加者は23カ国、380人にもものぼり、会議の基調講演者も、ハーバード大学の人類学者で東北タイをフィールドとする Stanley Tambiah、ウィスコンシン大学のタイ人歴史家の Thonchai Winichakul、タマサート大学の政治学者 Chaiwat Satha-Anand と、必ずしも南タイを専門とするわけではない研究者が名を連ねた。また南タイ出身で元外務大臣の Surin Pitsuwan、さらにはタイのシリントーン王女の参加もみた。

今回の会議は、その副題「人々のパースペクティブから見た現代の社会変化」にも見られるように、アカデミクスのみが議論をくりひろげる国際会議ではなく、NGO や村人などの市民の視点と

アカデミクスの視点を交わせ、よりダイナミックな南タイの姿を浮かび上がらせるという画期的な企図をもっている。会議の企画書は次の二つの目的をあげている。

- 1 アカデミズムにおいて人類学、社会学、経済学、政治学、宗教学等の学際的な対話の場を通して、南タイに関する知識の共有化をめざす。
- 2 南タイの市民サイドからの代表者との交流、対話を通じて、実践的な南タイにおける問題把握を行い、これからさらに対話を発展させる基礎となる枠組みの構築を行う。

実際の会議の場では、すべてのパネルの部屋においてタイ語と英語の同時通訳が配され、タイ語は英語に、英語はタイ語に通訳されつつ会議は進行した。

以下にパネルのタイトルを列挙する。

- 1 Discourse and Practice: The Poetics of NGOs in Southern Thailand /Grassroot Voices
- 2 Islam in Southern Thailand
- 3 The Environment, Regional

---

\*\* “The First Inter-Dialogue Conference on Southern Thailand: Experiencing Southern Thailand: Current Social Transformations from People’s Perspectives”

---

\* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。この記事は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』第106号に掲載予定のものと同一ものです。

- Infrastructure and Local Responses
- 4 Local Governance and Political Change
  - 5 Recent Transformations in Islamic Education
  - 6 Global and Local Tourism and Trade in Southern Thailand: An Industry and Its Effects
  - 7 Southern Minorities in Thai Studies
  - 8 New Trends in Historiography: Rethinking Regional Connections in Local Historiography
  - 9 The IMT-GT Experience
  - 10 Border Identities at the Southern Thailand/Northern Malaysian Frontier
  - 11 Sakais of Southern Thailand
  - 12 Identity and Citizenship
  - 13 The Performing Arts and Social Dialogue
  - 14 Nationalism and Muslim Identity
  - 15 Women and Leadership
  - 16 Islam and Buddhism from a Southern Perspective
  - 17 Dialect, Community and Location

これらからもわかるように、会議は 17 のパネルにおいてイスラームと仏教、イスラーム教育、環境問題、ローカル政治、マイノリティ、パフォーミング・アート、歴史学の新しい動向など多岐にわたるテーマで行われた。ほとんどのパネルは 3 日間の開催期間中、午前中のみまたは午後のみ、もしくは午前と午後あわせて 1 日という日程で行

われたが、そのうちはじめにあげた「ディスコースと実践: 南タイにおける NGO の詩学/草の根の声」と題する唯一の NGO 主体のパネルは、3 日間にわたり、ときには夕食後の深夜に及ぶまで連続して開催された。このパネルの発表者は、村で働く NGO もしくは村人自身であり、聴衆もまたこうした人々がほとんどであった。ここでは、若者の麻薬中毒問題や、漁村における水質汚染の問題、マングローブ林破壊の問題、ガス・パイプラインをめぐる問題など村人が現在直面している様々な問題が取り上げられ、熱心に議論された。政府の役人に対する不満とともに、成功例も報告され、ここで問題が共有されるとともに、成功した村のケースから今後の方策を模索するなど具体的な問題解決へ向けての展開もみられた。また、このパネルが最も広いに部屋で最も多くの聴衆を集め、380 人あまりと主催者によって発表された参加者のうち、おそらくアカデミクスは 100 人あまりで、のこりの 200 人以上はこのパネルに参加していたのではないと思われる。

これは、この会議の企画段階で、南タイで活動する NGO 組織や村々へ、参加を呼びかけ、また会議参加のための補助金なども支給するという主催者側の努力によるところが大きいであろう。また、タイのマスメディアを通じてこの会議はタイでは大きく宣伝、報道された。この会議を大きくとりあげたタイの英字紙 *the Nation* では、アカデミクスと NGO/村人のパネルに関する二本の記事を掲載した。

こうしたアカデミクスと村人を交わらせようとす

る主催者側の努力は、これまでのこうした国際会議には稀有なことであり、まずこうした試みをしたこと自体が評価されるべきであろう。しかし、実際の会議の運用においてはまだ多くの課題を残していることも確かである。確かにこの会議には村人とアカデミクスの双方がともに参加した。しかし、実際にはアカデミクス主体のパネルには NGO や村人に姿をみることはほとんどなく、また逆に NGO のパネルでは、パネルの組織者であり司会役であった少数の大学関係者を除いては、研究者それも特に海外からの研究者の姿は非常に少なかったといえよう。しかし、一方でこうした試みを *the Nation* の記事においては、NGO や村人がアカデミクスの用語を用いて国際会議という場において自らの意見を表明したとして評価している。この記事は、開会の辞においてタイのシンリントーン王女と、この会議をサポートしたハーバード大学の教授の挨拶の交換を、(国際会議につきものの)権力と権威の表出ともじりつつも、NGO パネルの開催を今までにはない新たな局面として評価しているのである。(おもしろいのは、アカデミクス紹介の記事は記者の実名で書かれているにもかかわらず、こちらの秀逸な記事は *Chang Noi* という匿名で書かれていることである。こうしたタイの王室に関わる、しかもある意味で批判的とも捉えられる記事はやはり匿名にせざるをえないのが現状なのである。)

この国際会議の二番目の目的とした研究者と村人の交流の成否はともかくとして、少なくとも一番目にあげた南タイを中心にすえた国際的、か

つ学際的な交流の場としては大きな成功を収めたと思われる。私自身南タイの調査にかかわり始めて十年以上が経過したが、こんなに多くの研究者が南タイをフィールドとしていたことに驚きを禁じえなかった。少数のシニアの研究者以外に 1990 年代後半に入り多くの若手に研究者がこのフィールドに参入してきているということが実感された。かつては、マレーシア国境近くの最南端におけるムスリムの分離独立運動など政治的活動のみが注目された地域であった南タイが、いまやタンバイヤやスリンが基調演説で力説したように、文化的、社会的にダイナミックで多様性を含んだ地域として注目を集めてきているのである。

今後この会議を四年に一度くらいの間隔でさらに続ける計画であるという。今後のさらなる発展を期待したい。なお、この国際会議の発表論文から選抜された論文集の編集が進められており、二年後にはシンガポール大学出版と国際的な流通網をもつ出版社との共同で 2 巻本として出版される予定である。